



# きらつと教育

晩年を迎えたあるシスターは余暇を利用して随筆を書き始めました。過去を追憶しながら、あるいは、日頃から考えていることなどを気の向くままに書き留めた文章の中に「きらつと光る」教育的な示唆があります。

8回シリーズの第3回目です。どうぞ、味わってください。

## 3 子供たちと動物

友人の葬儀の帰り、バスの窓から何組かの犬と散歩している人々を見た。何十年前の子供たちを思い出した。懐かしい。今はいい大人になっているかな。

ある晩、「シスター、犬のごはんをもっとふやしてくれんか」「なんで?」「シスターのごはん、うまいんや。」わたしはおどろいた。エサの事で大人と子供とのトラブルを避けるため、私が作ることにしていた。毎晩7時に子供が来る。色々な残り物を集めて作っていた。子供が食べても食べられるエサであるので、2倍に増やしてあげた。(それを見て)にっこり笑ってもっていく子供たちの顔に、私の疲れはすっ飛ばすことしばしばであった。

ある年、クラス担当とたのしいクリスマスを迎えてほしいと思い、飾り一セットをあげ、「たのしいクリスマスをしてね」というと、「うん」と言って持って行った。

どんな風に飾ったかなと思って、子供たちの部屋へ行った。びっくり。何もしてない、はてなーと思った。職員からにがい顔をされたが、子供たちが入れるよう、大きく作った犬小屋に行った。

きれいに飾られ、メリー・クリスマス、コロ!と書いてあった。

犬と子供、家庭から離れ、充分愛をもらっていない子たちは、動物がその部分を補っている。

私はその時のことを思い出されてなつかしい。難しい子供たちの心理、私はコロによって本当に助かった。おかげで子供たちと楽しい時をもった。

ユキオという女の子は、気に入らない事があると暴力を振るうので、恐ろしいと大人から敬遠されていた。ある朝、ユキオが「学校に行かない」と職員を困らせていた。「ユキオちゃん、何で学校へ行かないの」「だってなあー、うちがいないと、この猫すてるけん。」とユキオ。「私があずかってあげる」。

ユキオが拾ってきた猫。私は、その日、彼女が帰るまで猫番だった。学校から帰ってきたユキオは、かばんを背負ったまますっ飛んできた。猫を取りにきて、しっかり抱きしめて、「ママ、帰ってきたの、淋しかった?」母恋しいユキオ、涙…。

(シスターK.M.)。